



薄
い
石
地

八木橋本次郎

隨筆集 薄い石地 頒価一〇〇〇円

発行日 昭和四十七年四月十一日

著作者 八木橋 本次郎 ©

編集者 柿 沼 淳

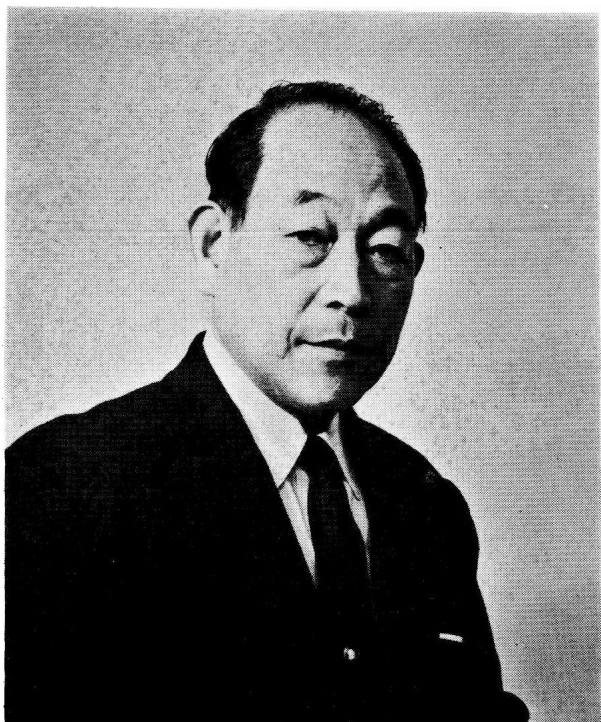
制作 現幻社 東京都稲城市平尾四〇七―一―五二―五〇四

発行者 小久保 誠

発行 株式会社・明広出版部 東京都品川区上大崎三―一四―三〇―七〇四

電話 東京(四四七)〇四九三

振替 東京三八一〇五



著者近影

序

「石地^{いぢ}」とは石の多い痩せ地のことで、クリスチャンの著者はむろんこの書名を、聖書
のマルコ伝第四章の「土うすき石地に落ちし種あり」から採られたのでしょう。

随筆を拝見しますと、直接著者からお話をうかがっているような気がします。親切で
人なつこくて行きとどいた感じです。そして人にも物事にも善意で対処され、すべて長
所は素直に認めてゆかれます。しかも急所では、立志伝的人物の判断や批判が鋭く光りま
す。もし強いて本書の短所を探しだすなら、妙にひねった解釈や、意地の悪い物の見方考
え方がなさ過ぎる点かもしれません。

著者の趣味は謡曲、絵画、ゴルフ、旅、投網と多種多様な方です。そしてこの質実で穩
健な実業人に、むかし文学や美術に憧れた青春の血が、今なお流れつづけているという一
事は、著者の人生や事業に大きな潤いを与えているに違いありません。そして趣味の広さ
は、そのまま人間の幅の広さにもつながっている訳です。

「おふくろの味」という一文があります。

「正月四日はわが家では全員母の家に集り、迎春のよろこびを交し合うことになってい
ます。（中略）母の子供と孫では三十人からになります」最後がお母さんの謝辞です。

「私は八人の女の子を育て、それがみんな、みなさんのようなよいおむこさんと一緒に

なつて仕合せに過しているのが、何より嬉しいんです」

私は、それをききながら、店でいろいろ苦勞した一年間の肩の重荷がすうっと、とれてしまつたような気がしました。

これこそ心がけのよい努力と幸運の結合した、宝物みたいに貴重な親族会というほかはありません。

本書には人の心を温かく包んだり、厳しく戒めたりする佳話がたくさんあります。つまり人間に本来の人間性をチャージしてくれる、電源のような本といつてよいでしょう。

ところで百貨店の百は多くのものという意味で、数の百ではありません。しかし誇大宣伝の多い今の世に、万単位の品数を扱いながら、百貨店とは、何と控え目な呼び名でしょう。わずか数年で故障する万年筆さえあるのに、百貨店とは奥ゆかしい限りです。そして著者はこんな冗談を、笑いながらうなずいて下さる方なのです。

昭和四十七年一月

渋沢秀雄

八木橋本次郎†薄い石地・目次

序 沢沢秀雄 1

詩篇

†若くして愛児を失える妻に 12 †山の彼方 15 †指笛 18 †いのち
23 †一九七〇年への祈り 27 †バンコック旅情 31 †旬日記抄 36

身辺断章

†古いもののよさ 42 †友情 45 †少年の夢 48 †妻への土産 52 †
幼子 57 †中秋名月 62 †わが青春の記 66 †一粒の麦 69 †青い麦
となった熊谷青年会議所 75 †おふくろの味 78 †スチュワードスの敵し
さ 82 †Tさんのお手紙 86 †失業の園 91 †いのちの夜明け 96 †
現実煩悩の世界に 100

ときの流れに

†移りかわる熊谷 110 †沖縄の土を踏む 113 †結婚・仕事・家庭 120 †
純真な子に学ぶ 122 †愛国心について 125 †「ヨミセテの樹」に思う 129 †
†いのちの挽歌 133 †公害と鉄道唱歌 137 †文化の日の偶感 141 †情
緒のゆくえ 146

旅つれづれ

↑こころの旅 152 ↑社内旅行 154 ↑京洛の晩秋 157 ↑吾寺への郷愁 160

↑「佐渡おけさ」の持つもの 164 ↑旅 167 ↑旅 181

故人今人

↑名人考 194 ↑丹青イマダ会心ノ図アラズ 199 ↑栄える人々 203 ↑渋沢

青淵翁に学ぶ 209 ↑斎藤茂八先生を憶う 212 ↑名指揮者 217 ↑武者小路

先生の書 221 ↑企業の中の人間像 225 ↑指笛の吹けない弟子第一号 233

↑「細うで繁盛記」に学ぶ 239 ↑「細うで繁盛記」後日譚 243

店とともに

↑和服こそ日本の美 248 ↑焼け残ったお得意名簿 254 ↑先代社長の追慕

260 ↑勘からの脱却 267 ↑八木橋を選んだ社員に 270 ↑言葉づかいと心の

美しさ 276 ↑「真心」を貫こう 279 ↑商魂はさりげなく優雅に 284 ↑商

売のタイミング 288 ↑左右よし 天地の開きさらによし 291 ↑相働きて益

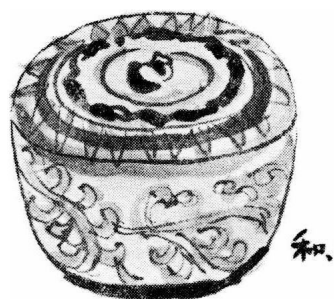
となるを 我らは知る 294 ↑八木橋の歩みを振り返る 300

後記 331

薄い石地

装画・渡辺
和則

詩篇



若くして愛児を失える妻に
十輝躬の死

妻よ、歎くことをやめて顔をあげてごらん。

その濡れた臉のかげから

死んだあの子の姿を消して

新たなる慰めの光に涙をかわかし

今は微笑むことも大切なことだ。

幼い生命を護ろうとして

あのひたむきな努力の中に

母のすべての義務は果たされたと思う。

思えばわたし達より先に神様に召されたあの子は

この世の苦しみを知らず

思い悩みに遭うこともなく

清い魂を天国に召された。

妻よ、神さまに感謝しよう。

なれど、あの子の産声を私にきかせた刹那の

力尽き、安堵したあの、ろう細工のような崇高な

君の姿をおもえば

どうして私はあなたにそのようなことを言い得るだろうか。

終日食物の、のどを通さず

幾夜眠らぬ愛児の枕辺にあつて

呼吸をおさえ死をみまもる若き妻よ。

別れゆく愛児への無限の悲しみに

私の涙も枯れ胸はうずく。

だが妻よ、今こそ私たちは祈りをもって神に感謝しよう。

この世の悲しみが深ければ深いほど